

農園ぱらだいす

く愛しのアマゾネスく

大森句子

登場人物

河村ソノ子 (園子)	39歳	老舗映画会社の経理部社員
河村ユリ子 (百合子)	35歳	ソノ子の妹
河村サナエ (早苗)	65歳	ソノ子の母
田谷アキオ (秋男)	39歳	ソノ子と小、中、高の級友
清原サト子 (里子)	67歳	ソノ子の母と幼馴染
吉川ネリ (旧・清原)	39歳	サト子の娘、ソノ子と級友
村上サユリ (小百合)	41歳	ソノ子の先輩、元数学教師
大沢ミズキ (水木)	39歳	ソノ子と級友、農協職員
森田オウ子 (桜子)	35歳	ソノ子の妹、ユリ子と級友
原田ヨウ子 (葉子)	28歳	ソノ子の家の隣家の娘
澤村ナツキ (夏生)	35歳	東京芸術大学建築学部助手
水野ハルヒコ (春彦)	65歳	水分 (みくまり) 神社宮司

時

現代

場所

東京近郊のどこかの町(とは言っても、少し前まで〇〇県〇〇郡〇〇村大字〇〇だったところ)
ソノ子の家の離れ、野菜の集荷場

東京近郊の集落にある河村家の離れ。
野菜農家（主に葉もの）の集荷場として使っている雑然とし
た小屋のような所。

数年前にこの家の主が脳梗塞で亡くなり、今は連れ合いのサ
ナエが細々とやっていると、普段は空き家同然である。

靴を履いたままで出入りし、奥には簡単なキッチンやトイレ。
簡単な用時なら母屋に行かなくともすむ造りになっている。

明日は水分（みくまり）神社の雨乞い祭り。

その準備のために午後から集落の女達が手伝いにやって来る。
河村サナエ（65歳）は去年流行った〇〇の曲を大声で歌い
ながら、部屋を整え茶菓子の用意をしている。

離れの外では、大きな腹を抱えた若い女がのっそりとやって
来るが：

サナエ （母屋に向かって）ねえ、ソノ子。早くしなさいよ！
ねえ、ソノ子ったら！

返事がない。

サナエ、今度は母屋に向かって顔を出し、大声を張り上げる

サナエ ソノ子！ ソノ子ったら！

サツと影がはしったようだ。（女、慌てて離れる）

サナエ 誰？ 変だねえ…、誰かいるみたいだったけど…、

母屋からうんざりといった面持ちでやって来るソノ子（39
歳）。いつのまにか女はいなくなっている。

ソノ子 母さん、そんな大声出さなくて…。2時ぐらいから

ボチボチ始めようってことなんだから。ゆっくりでいい

んだよ。まだお昼御飯食べたばかりじゃないの！ 母さ

んが大声出すから翔（かける）お昼寝しそうだったのに、

眼開けちゃったよ！

えっ、やだ、翔、まだお昼寝しないのかい？

ウン、ったく、ユリ子怒ってるよ、

そんなこと言ったってお前…、

だからこつち手伝うの、もうちよつと後になるって。

そんな言い訳して…。お祭りの手伝いぐらいしたってい

ソノ子

たんだ。

えっ、そうなの？

サナエ

嫁さんがサ、今時同居は嫌だって出て行っちゃまったんだよ。それで後を追って長男も出て行った。

ソノ子

ふうん、そうなんだ。

サナエ

だからさ、なんだかんだ言っても、出て行かれるよりはいいってもんさね。

ソノ子

でも母さんは、ユリ子も翔も甘やかしすぎ。結局、翔を押し付けられて大変なのに腰が痛い、痛いつて言いながら嬉々として世話をしてるんだから。

サナエ

オウ子ちゃんのとこだって、大変だって言いながら嬉しそうに孫の世話をしているよ。

ソノ子

全く呆れるわ。

サナエ

だってさあ、ユリ子可哀そうだよ。相手の女も孕んでた、って言うじゃないか。

ソノ子

騙されちゃダメ。カアイソウな元人妻を演じてるだけなんだから。(咳)ほら、この間の遅くなった日だって、残業かと思ったら、オウ子ちゃんと飲んで帰って来たじゃない。(咳)

サナエ

それぐらいめつぶっておやりよ。息抜きつてもんだよ。

ソノ子

まあね。(と咳込む)

サナエ

大丈夫？

ソノ子

ウン、ちよっと…、

サナエ

気を付けてよ。翔だってママがお休みの日ぐらいは甘えたいんだよ。子供って敏感だからね。だからなかなかお昼寝しないのサ。

ソノ子

そうだね。(さらに咳込む)

サナエ

やだ、風邪かい？ 寝込まないでよ。皆が手伝いに来て、肝心のソノ子がいなかったら困るんだからね。

ソノ子

大丈夫、ちよっと咳込んだだけ。だけど、水分(みくまり)神社のお祭りの準備の為に今日は家(うち)が場所を提供してるんだからね。そんなに気をつかうことなんてないよ。

サナエ

そりゃそうだけど…、どうせここ空いてるんだし、それにお祝い事だから。

ソノ子

お祭り、って騒いだって若い人なんかだあれも来やしないよ、第一いないじゃない。

サナエ

いるじゃないか、ソノ子お前が。それに同級生のアキオだって。

ソノ子

フン、若いつて言ったって、もう39、来年は40！

サナエ その年で今年も巫女をやらせてもらえるんだ。ありがた
いことじゃないか。

ソノ子 フン、あんなもん。

サナエ 何を言ってるんだね、この娘（こ）は。私たちの頃はサ、
巫女をやらせてもらえるなんて光栄だったんだよ。川端
地区の川端小町って言われて。あたしなんか自慢じゃな
いけど、

ソノ子 えっ！ やったの母さん？

サナエ （つまつて）自慢じゃないけど一度も頼まれたことなん
てなかったサ。

ソノ子 （大笑い）ヤダ、母さん！

サナエ だけどね、だからだよ。幼馴染のサトちゃんなんか東京
のデパートの店員なつてからもお祭りの時は必ず寮から
帰つてきて巫女さんやつてたよ。

ソノ子 そりゃ母さんの頃はサ、

サナエ お前たちの頃だつて：。ほら、サトちゃんの娘のネリち
ゃんだつて望まれて高校生の頃から女子大生の頃までず
ーっとやつてたじゃないか。うちのユリ子だつて：、あ
の時あたしはね、やつと水分神社のハルヒコのやつ、河
村家の美貌に気づいたか、つて思ったね。

ソノ子 えっ、美貌？ 河村家にはほど遠いお言葉！

サナエ 何言つてんのサ、そりゃサトちゃんやネリちゃん親子の
ようにパツと華やかな顔立ちじゃないさ、だけど、なん
ていうか控えめな、和風のゆかしい美しさがそこはかと
なく漂うじゃないか。

ソノ子 ハイハイ（笑）ここだけの話にしてヨ。

サナエ ソノ子、お前つたら親をバカにして：、
だけど川端小町のネリは嫁に行き、それからユリ子も嫁
に行き、そして誰もいなくなつた：。だから三十路の私
にお鉢が回り：。まるでアガサクリステイ：だよ。

ソノ子 フン、そんなこと言つて：。ハルヒコの奥さんが言つて
たよ。この神社の巫女をやつた娘は必ずや良縁にあやか
れる、つてね。

ソノ子 じゃ、奥様に聞いて？ 何でユリ子はお戻つてきたので
しょうか？ 自慢じゃないけど、何で私は毎年毎年、水
分（みくまり）神社の巫女を頼まれるのでしょうか？

サナエ ソノ子、お前つたら：。

ソノ子 ああ、うんざり、今年も巫女だなんて。この地域、女な
んかうじやうじやいるじゃない。

サナエ ああいるさ。後家さんや出戻り女つばっか。しょうがな

ソノ子　　いだろ、この川端地区じゃ嫁に行っていないの、ソノ子、お前だけなんだから。

ソノ子　　そうだ、隣のヨウ子ちゃん、まだ28だよ。お祭りの日にだけこっちへ帰って来てもらえばいいじゃない。青山の美容サロンだから早めに頼めば何とかなるんじゃない。まっ、今年は間に合わないけどサ。

サナエ　　それ無理。近じか、結婚するらしいよ。お隣の奥さん、嬉しそうに話してたもの。

ソノ子　　ふうん。嫁に行くのか…、

サナエ　　もったいないねえ、折角美容師の資格取ったのに。

ソノ子　　やだ母さん、今時結婚したからって家庭へ入る人なんかいないわよ。第一あの時あんなに大騒ぎして美容学校へ入れたんだから。つづけるに決まってる。

サナエ　　そうそう、あの時ヨウ子ちゃん、新宿の山野愛子の美容学校や、六本木のメイ牛山の美容学校じゃなきや嫌だ、って大騒ぎして…、

サナエ　　親としてはサ、近くに通わせたいもんだから、あたしが間に入って大変だった。

ソノ子　　そうそう、結局家から通える近くに決まって…、その代り卒業してからは、念願の青山の美容サロン。

サナエ　　早いもんだねえ、その子が嫁に行くんだからねえ…。

ソノ子　　参ったなあ、巫女さんやる娘、どっかいないかなあ…。

サナエ　　まっ、お祝い事なんだから協力しようよ。

ソノ子　　水分神社には、いつだって充分協力してるじゃない。今日だって此処貸してあげるんだから。だけど家（うち）がそんなに頑張らなくて…。

サナエ　　仕方ないじゃないか。宮司のハルヒコのところじゃ手狭で人手も足りないんだから。

ソノ子　　ホント、しけた神社。

サナエ　　そんなこと言って…。それでもさ、由緒正しい歴史ある神社だからって、亡くなった先代の奥さん、ハルヒコを必死で國學院へ通わせてた。あの頃はどこも貧乏だったからね。

ソノ子　　ふうん…。

サナエ　　まっ、あいつとは幼なじみ。この年になるとさ、お互い、持ちつ持たれつってもんよ。

また影が走る。
そこへサナエの幼馴染の清原サト子（67歳）がやって来る。

サト子 あれ、誰か…？
サナエ そうなの、さつきも誰か来たみたいで…、
サト子 ウン、
ソノ子 もしかしたら、ミズキちゃんとお母さんかなあ…。
サナエ えっ？
ソノ子 最近お母さんが黙って家から出ちゃうことがあるらしいんだ。(と、外を見に行く)
サナエ えっ、それって大変じゃない。
ソノ子 やっぱりいないか…。どうもちよつと最近痴呆が始まってるらしくて…、
サナエ そういえばミズキちゃん、そんなこと言ってた。農協の新鮮野菜直売所へ小松菜卸に行った時、
サト子 大変だねえ…。あつ、これ、皆が来たら出してあげて。
後でうちのネリも手伝いによこすから。
ソノ子 わあ、ふかし饅頭！
サナエ ありがと。いつもすまないね。
サト子 フフ…、今日のは、今はやりのあんまし甘くないやつ。
ソノ子 ありがと。みんな喜ぶよ。ダイエツト、気にしてるから。サト子おばちゃんも一緒に食べよう。
サナエ そうよ、せっかく作ったんだから。
サト子 あたしはサ、やっぱりお饅頭は甘い方が好きなの。それにそうもしてられないのよ、3時半から教室だから。
サナエ 偉いね、今度は東京のカルチャーセンターだって？
ソノ子 えっ、そうなの？
サト子 高速鉄道も伸びたし、今じゃ地下鉄だってあるじゃない。どうってことないの。駅まで車で行けば、そこからは、あつという間に東京。
サナエ ホント、若い頃を思ったら夢みたい。
ソノ子 私だって昔は、通学も通勤も大変だった…。ホント、今はらくちん。
サナエ そう言って…いつまでここにいろんだらうね。サトちゃんちのネリちゃんみたいにエリートの商品マン捕まえて玉の輿に乗れば…。そしたら母さんだってカルチャーセンター行けるんだけど。
ソノ子 行ってたじゃん、公民館でやってるアレンジ・フラワー。それからフラダンスにパッチ・ワークに、コーラス。ほら、パッチワークの手提げ袋なんか家んなにごろごろしてる。出かける所もないくせにあんなに作ってどうするのサ。
サナエ あ、あれはサ、だから皆に配って喜んでもらってるよ。

ソノ子 何言ってるの母さん、みんな本当はウンザリしてるんだからね。それからええつと…、
 サナエ そんなんじやなく東京、東京のカルチャーセンター！
 サト子 あーら、誘ったじやないの、そしたら孫の世話があるから東京まではとても通えない、そっちが断って来たのよ。
 サナエ そうなの、今はとても通えない。ユリ子が孫の翔（カケル）を連れて戻って来たから。おまけに東京へ働きに出たから結局私が面倒見なきゃならなくて…、男の子だもの、目が離せない。
 ソノ子 だから私のせいじやないって。
 サナエ そりやそうだけど…。
 サト子 それでユリちゃん、お勤め続きそう？
 ソノ子 ウン、結婚前のように大手の会社じやないけどね、張り切って通ってる。
 サト子 ならいいんだけど…。本当は浮気されたって、じつと堪えていれば男なんていつか絶対戻って来るんだけどね。
 サナエ 何とか元の鞆に収まるかといんだけど…。
 サト子 何言ってるの、こらえ性がなくてサツサと戻って来たのお前さんの方じやないか。
 ソノ子 あたしのことはサ、だからだよ、だから言ってるんじゃないか。
 ソノ子 大丈夫だよおばちゃん。母さんやおばちゃんに同情買つてしおらしくしてるけど、ホントはユリ子、女に亭主讓つて泣く泣く帰って来たわけじやないよ。女房が妊娠中に他の女を孕ませた亭主にうんざりして、愛想が尽きて戻って来ただけだから。
 サト子 えっ、そうなの。
 サナエ ソノ子、そんなキツイこと言つて…、もつと優しくしておやりよ。
 ソノ子 フン、母さんたら甘いんだから。それよりおばちゃん、ホントにネリ、手伝ってくれるの？
 サト子 ああ。今日は孫のトオルがあつちのおばあちゃんちへお泊りだから、ゆっくり出来るのよ。
 ソノ子 あら、ネリはいつだってゆっくりじやない。旦那の転勤先の大阪へ行かずに、こっちにいるんだもん。
 サナエ いいわねえ、お宅は。同じ実家に戻ってきてても、うちとは大違い。私なんて還暦過ぎてもソノ子とユリ子にこそ使われて痩せる暇がないんだから。（と、饅頭をパクリ）
 ソノ子 母さんたら…、痩せるわけじゃない。
 サト子 ホント、私達、もうちよつと痩せてたら、いい男見つつか

るのにね。(と、饅頭をパクリ)

おぼちゃん：！ 今更男見つけてどうするのさ？

あーらソノちゃん、女はねえ、いつだって女優なんだよ。

(ポーズをとって) 私は綺麗、私は女優！

そうだよソノ子、コーラスの先生が言ってたよ。『私は綺麗、私は女優』

そうやって胸を張ってお腹から声を出す。

お腹から声を出すのって健康にも美容にもいいんだって。

ねえ、サトちゃん。

そうそう。

サト子 (同時にポーズをとって) 私は綺麗、私は女優！

ソノ子 ったく、あきれてものも言えやしない。それよりおぼちゃん、カルチャーって今度は何の勉強なの？

フフーン、さあてなんでしょう？

サト子 わざわざ東京くんだけりまで行くんだから、公民館でやっ

てないものだね。

：公民館でやってないもの：、

あなた、まさかシナリオ？

まさかでしょ。

サト子 だってサトちゃん、昔学校さぼって七回も「ウエストサ

イドストーリー」観に行ってたじゃないか。

えっ、そうなの？

七回じゃなくて十回。

サト子 いつかシナリオライターになるんだって色々応募して：、

ハハ：、そうだったね。

サト子 卒業してからもデパートの店員やりながら、諦めずにコ

ンクールに応募して：、

へえ、凄い！

サト子 ほら、ソノ子の会社で昔、ポルノ、そうそう『日活ロマ

ンポルノ』のシナリオ募集してて、そしたらこの人った

ら、男の人の手も握ったこともないくせに、たしか『何

とかは濡れた』っていうシナリオ応募してた。

えっ、『何とかは濡れた』？

ソノ子 (セクシーな振りで) 若い男の指が、震える女の身体を

這っていくと：、

這っていくと：？

『濡れた二人』！

えっ？

ソノ子 そうそう、『濡れた二人』

サト子 へーえ、うちの会社、昔そういうの募集してたって聞いたことあったけど、本当に応募してくる人がいたなんて

ソノ子

サト子

ソノ子

サト子 …、それも身近に！
 サナエ そんなこともあったねえ、はるか昔…。
 サト子 そうだね、はるか昔…。
 サト子 ソノちゃんみたいに映画好きだから映画会社勤務、羨ましい。
 ソノ子 そんな：羨ましがられるほどじゃない。第一、映画会社って言ったってただの事務員。ならば私みたいなものより賃金の安い若い子の方が、会社としては助かるから最近
 は肩たたきの対象。
 サナエ えっ、そうなの？
 ソノ子 おまけにけっこうな退職金ちらかせてさ。
 サナエ だったら何もそこじゃなくてもいいだろう。転職だって悪かないよ。その、けっこうな退職金、しっかりともらってさ。
 ソノ子 所属は経理部、ただの事務員…。クリエイティブでも何でもない。：けど迷ってんだよね。
 サト子 なら、のさばってやんなよ。なんてったって、老舗の映画会社だよ。
 ソノ子 ウン、居ずらくても居座ろうかなあ…。
 サナエ そんなこと言ったってソノ子、お前は映画監督でもシナリオライターでも、何でもないんだからね。
 ソノ子 そう…、だけど…映画から離れたくないっていうか…、ホントは嫁に行ってくれるのが一番なんだけどね。
 ソノ子 それ、ない！ トキメク男いないし、もらってくれる男もないしき。
 サナエ だってお前…、
 ソノ子 それにめんどくさい。
 サト子 だったらいつそ割り切って、アマゾネス。
 サナエ 何それ？
 サト子 アマゾネスだよ。はるか昔ギリシャの国に、女だけの部族があつて…。ここだって同じようなもんじゃないか。
 サナエ 女だらけ。
 サト子 やだよ、それじゃ子孫が途絶えてしまうじゃないか。
 サト子 そんな時は、よそへいって子種をもらって…、
 ソノ子 ヤダ、おばちゃん、映画の観すぎ。テレンスヤング監督。
 サト子 そんなこと言っても、此処だって、どこの家も出戻り娘ばっかじゃうじゃしてる。
 ソノ子 でもおばちゃんは偉いよ。今でも『シネマ（映画）の少女』だもん。
 サナエ それ言うなら『シネマ（映画）のおばば』

サト子 けど若い時は、無謀って言うか、なんていうか……。映画好きだったらシナリオライターになれる、なんて……。結局、私達って何物にもなれなかった普通のおばさん。えっ、おばさん？ っていうか普通のオババ。見るのと書くのでは大違いなのに勘違いしちゃって。あんた、いつだって勘違いじゃん。ほら、亭主が間違い起こしたからって、ネリちゃん連れてさっさと実家へ帰ってきちゃって。どうってこたない、ただの浮気なのに。そうこうするうちに親の介護が始まって戻るに戻れなくなり、ズルズル居着いてとうとう離婚。

ソノ子 そうそう、ネリが転校してきたの、中学二年の時だった。

サト子 小説、小説講座！

サナエ えっ、小説……？

サト子 今度のカルチャーセンター。

サナエ フン、そうやってすぐはぐらかす。

ソノ子 すごーい、おばちゃん！ 主婦作家、今流行ってるのよ。こないだも新聞に載ってた、普通のおばさんが芥川賞取ったんだって。

サト子 そんな大それたもんじゃないけどさ、只の暇つぶし。暇つぶし、ってか、えっ、ひつまぶし？ あれ上手いよね。

ソノ子 やだ、母さんたら。

サト子 いいの。あんたの母さん、いつだってこうなんだから。それより驚いたのはサ、その講座に、ミズキちゃんがい

サナエ たんだよ。

ソノ子 えっ、私とネリと同級の？

サナエ あの農協に勤めているミズキちゃんかい？

サト子 そう。この間昼の部に出席できない日があつて、授業を夜に振り替えてもらったの。そしたら、いたのよ、彼女。えっ、へえー、意外だねえ。でもあの子、目立たないけどいい子だよ。農協の新鮮野菜直売所へ小松菜を持っていくと、一番いい場所においてくれるんだ。「ソノちゃんちの小松菜が一番アクが少なくて甘くておいしいから」って言うって。やっぱ、売れる場所ってあるからさ、ホン

サナエ ト助かる、ありがたいよ。

サト子 でも、小説講座だよ。

ソノ子 ウン。でも、そういえばミズキ、学校の休み時間、いつも本読んでたな。

サト子 夜のクラスは大勢だから向こうはあたしのこと気づかなかったけど、でもあたし結構驚いちゃってさあ、

ソノ子 ウン、わかる。
サト子 だって、いつもの農協のミズキちゃんとなんか感じ違うんだよ。どこがって言うわけじゃないけど、ミズキも東京のカルチャーセンターに通うなら、いつそ東京の会社勤めにすればいいのにな。地道に地元でそこがあの子のいいところじゃないか。地道に地元で地味に働く。認知症になりかけたお母さんをデイサービスに連れていったり、それにはやっぱり地元が一番なのさ。ミズキ大変だ。結局は一番最後に実家にいる子が、一番貧乏くじ引いちやうもんね。
サナエ 何言ってるのさ、うちなんかその反対、今でいうパラサ：なんとかなんだから、
サト子 それ言うなら、パラサイト！
ソノ子 そう、パラサイト。じゃなくって、父さん死んで、母さん独りになったから心配して帰ってきてやってたんだよ。
サト子 そうだよ、ありがたく思わなくっちゃ。
サナエ そうかねえ。
サト子 そうだよ。けど、ミズキちゃん意外だよ。え、小説書いているなんて。
ソノ子 えっ、でも、そうね、そうかも。だってウワサあったじゃん。ちよつと前に流行った携帯小説、あれ書いてたって。それもきわどい官能小説。
サナエ まさかあ、あの子、嫁に行つて二カ月で帰つて来たって言うよ。何でも嫁ぎ先のその男、いい人がいたんだって。それも彼女じゃなくて彼氏。
サト子 それって、あたしも聞いたことある。仕方がないから娘のまま戻つて来たって。ホントかわからないけど。
サナエ だからさあ、かえつて妄想が膨らんで、
ソノ子 やだ、おばちゃんたら。だけど、だったら、巫女を代わつてもらいたい。正真正銘のおとめ（処女）だよ。何言ってるんだい、ソノ子、お前こそ嫁入り前だからね。やめてよ母さん、私だって私だって、男の一人や二人！えっ、いるのかい？ だったら連れてきておくれ。
ソノ子 い、いないけど、だけど、そんなにモテないってわけじゃないんだからね。
サナエ ソノ子、お前、何ふくれてんのさ。
サト子 そんな、今時：（笑）。それに、此処には田谷さんちのアキオだっているしさ。
ソノ子 ヤダ、おばちゃんまで。
サナエ そういえばアキオ、遅くない？ 皆で作業するおひねり

用の和紙と餅を運んでくれることになつてゐるのに。
ソノ子 そうだね。アキオのやつ、何モタモタしてんだろう。
サナエ そんなこと言っちゃ悪いよ。この地区に残つてゐる若い
サト子 男はアキオ一人。結局色々な役目を頼まれちゃうのさ。
サナエ 多分、神社の方の手伝いに手間取つてるんだよ。
サト子 そうそう、同級生じゃないか。も少しアキオに気をつか
つてさ：
サト子 それにアキオ、毎年係りを頑張つてゐるのは、ソノちゃ
んがいるからだつてもつぱらの評判だよ。
ソノ子 ヤダ、何それ、
サト子 だつて、この地区で独り身は、ソノちゃんとアキオだけ。
ソノ子 だからつて、残り物同志をみんなでくつつけようつて魂
胆がありあり：
サナエ まさか。でもそうなつたら、いい話じゃないか。
ソノ子 母さん、何言つてるの。
サト子 でもアキオ、張り切つてるよ。
ソノ子 だつたら、なおさらイラつく！
サナエ そんなこと言つて：
ソノ子 アキオがいるからこの地区は大助
かりなんだよ。
ソノ子 それにおばちゃん、アキオのやつ、今だつてネリに惚れ
てるよ。
サト子 そんな！ネリは亭主のいる身だよ。
ソノ子 関係ないよ。好きなものは好き！
サナエ ソノ子、この子つたら何を言い出すのさ。
ソノ子 アキオ、こないだネリが実家へ戻つて来たこと聞きつけ
て心配して私に電話かけて来たんだよ。
サト子 ヤダ、旦那が大阪に単身赴任だよ。だつたら、東京にい
るより実家にいる方がいいからそうしてるだけ。
ソノ子 そう言つたよ。だけど：
サナエ サトちゃん、気にしない、気にしない。クラスメートの
こと、心配して掛けて来ただけなんだから。
ソノ子 ならいいんだけど：
サト子 （と、思わせぶりに）

そこへ田谷アキオ（39歳）が、大きな荷物を抱えてやつてくる。背広姿の澤村ナツキ（35歳）を連れて。
アキオ、澤村にここで待つよう促し、離れの方へ行く。
あつ、影がはしつた。

アキオ あれ、誰かな？（入つてきて）こんちわ。遅くなつて

ソノ子　　もう待ちくたびれた。
アキオ　　ゴメン、ゴメン。はい、これ。餅の分、八百。この作業
が終わるころに小銭の分を用意してまた八百持って来る。
サナエ　　ありがとさん。あつち（神社）の方は大丈夫？
アキオ　　ああ、おかげさんで大分準備が出来た。
ソノ子　　（大げさに）よかった。皆が集まる前に材料が届いて。
アキオ　　出がけに芸大の建築科の先生が調査の依頼に来ちゃって
さ、あせったぞ。
サト子　　へーえ、調査って？
アキオ　　東京近郊農家における近代建築の調査だと。
サナエ　　何それ？　　なんか、難しい…。
アキオ　　宮司さんの知り合いが芸大の偉い先生で、その先生の弟
子がこの地区の調査をしたいということ。頼まれたんだ。
ソノ子　　こんな何にもない地区に？　　（と、咳）
サナエ　　ソノ子、さつきから大丈夫かい？　　夏風邪だったら大変
だよ。
ソノ子　　大丈夫。でもホント、風邪でもひいて巫女さん、誰かに
代わってもらいたい。
サナエ　　この子ったら何てこと言うんだらうね。バチがあたるよ。
アキオ　　大丈夫か？　　代わってはやれないが…。
サナエ　　アキオ大丈夫。この子ったら巫女をやりたくないものだ
から親を脅かしているだけ。
サト子　　ソノちゃん、諦めた方がよさそうだよ。まっ、今夜は早
く寝てサ、
ソノ子　　ウン、そうする。
サト子　　だけど、その学者さん、こんな古い土地のぼろい家見て、
何か面白いことでもあるのかねえ。
アキオ　　さあ、それは…、あつ、外に待たせているんだ。（外に向
かって）澤村先生、どうぞ。

相変わらず腹の大きな女がうろろうろしている。
その女が気になりながら待っていた澤村、呼ばれ入って行く。

アキオ　　今話した澤村先生。
澤村　　初めまして、澤村と申します。（名刺を差し出す）いやあ、
先生ではありませんが…、

その爽やかな澤村に、トキメク、ソノ子、サナエ、サト子。
皆、名刺を受け取ろうとして…、

素早くソノ子受け取り読み上げる。

ソノ子 東京芸術大学、建築学科、研究員、澤村夏生（ナツキ）。

澤村 ハイ、澤村と申します。

サト子 まあ、芸大！ 芸術だなんて…、素敵ですね。

アキオ 芸術といつても、先生は建築の方ですよね。

澤村 はい、建築史を研究しています。その、近代建築を。

サナエ でも、芸大なんて素敵ですわ。この地区は女性がいつ

ぱい。うちにもほら、ソノ子がおりますの。

サト子 そうそう、この地区は女性がいつぱい。もうよりどりみ

どり、よろしくね。

澤村 はあ…。

アキオ おばちゃん達、よしてくれよ。

ソノ子 ホント、お客様に失礼よ。すみませんねえ、驚きました

でしょ？

澤村 は、はあ…。

サト子 だって、ほらアマゾネス、フフ…、素敵な子孫を残さな

きや。

アキオ おばちゃん！ すみません（澤村に）

澤村 い、いえ…。

サト子 そんなこと言って…、ホントはサナエちゃんだってそう

思っているくせにフフ…。

サナエ そりゃ、そうだけど…、

ソノ子 （もう無視して）それで、調査の協力って、私共はいつ

たい何をしたらよろしいのでしょうか？

澤村 すみません、この度は大変無理なお願いをしまして。

サナエとサト子 無理なお願い？

澤村 実は農家の建物を調査しております…、

サト子 だったらこちら辺りでなく、信州とかもつと田舎の方へ

行かれた方がいいのでは？

澤村 はい、地方の養蚕農家とか、独特の工法を用いて建てら

れた家々ですね。しかし地方だけでなく東京近郊の農家

にも独特な工法がありまして…、私はそこを研究してお

ります。しかし残念なことに年々建て替える農家が多く

て…、時間との戦いと言いますか…、是非、協力をお願

いしたいと思えます。

ソノ子 協力って…、いったいどのようなことをすればよろしい

のですか？

澤村 本格的な調査になると数日かかることもありますが、そ

の前に、調査ができる家であるかどうか見て回りたいの

です。それはさほど時間はかかりません。今日はお祭りの準備で皆さまが集まるといふことですのでお願いに参りました。

ソノ子　じゃ先生、うちから見て行ったらいかですか？　そのうちに皆が集まってきますから、そしたら私、皆さんに話しておきます。

サナエ　そんなこと言ったってソノ子、うちは孫のカケル（翔）が部屋いっぱい散らかしているから…。

ソノ子　そんなの、大丈夫よ。

澤村　あつ、そのままでもいいですから。部屋には上がりません。造りを見るだけですから。

ソノ子　ほら、母さん。先生もそう言ってるから…、
サナエ　そうですか。じゃ、どうぞ。

澤村　ありがとうございます。

サナエ　（ソノ子に）カケルがお昼寝したら、後でユリ子を手伝いによこすから。
ソノ子　ウン。

サナエ　それに誰か子供連れてきたらこっちで預かるよ。
ソノ子　ありがと。

サト子　あつ、もうこんな時間！　じゃ、あたし行くね。

ソノ子　未来の作家先生、頑張つて！

サト子　フフ…、清原サト子、頑張つて行ってきます！

飛び出していくサト子。

澤村を「さつ、先生どうぞこちらへ」といって、母屋の方に案内するサナエ。

残ったソノ子とアキオ。なんとなく手持ちぶたさで気まずい。

ソノ子　時間もったいないからさ、作業初めていようか。

アキオ　そうだな。要領教えたら俺、神社へ戻る。

ソノ子　ウン。

アキオ　去年もやったからわかっているだろうけど、この和紙に餅を入れて、こうやって包む。

ソノ子　こうだね。

アキオ　うん、そう。だけどこうやった方がスッキリするかな。

ソノ子　えっ、どうやって？　（と、近づいてのぞき込む）

アキオ　（どぎまぎして）ここをこうやってと…、

ソノ子　ああそうか。…こうやって、と…、出来た！

ソノ子、仕上げたのが嬉しくて顔を上げると、思いがけない

近さにアキオの顔が……。驚いて、さっと離れる。

ソノ子 (戸惑いながら) これでいいよね。

アキオ ウン。

ソノ子とアキオ(同時に) あの、

アキオ どうぞ。

ソノ子 そっちから、

アキオ じゃ、巫女さんの件だけど、

ソノ子 うん、

アキオ もう未婚の女性とか、そういうことにこだわる時代じゃないと思うんだ。実際、もしソノ子がどっか嫁に行っちゃ

やえば、
あつ、それない。

ソノ子 どうして？ いずれは行くだろ？

アキオ どうして？ どうして行かないかやいけないの？

ソノ子 うーん、普通は行くもんだろ……。

アキオ うんざりなんだよ。嫁に行つてあれこれ煩わしいことが、

アキオ そりゃ……、

ソノ子 私、ホントのこと言つて今が一番楽なんだ。父さんが亡くなつてから母さん一人。可哀そうになつてこつちへ戻

つてきたら、地下鉄が伸びたから前より通勤は楽だし、

掃除洗濯しなくていいし、残業終わつて帰つてきても、

ほっかほかの御飯にありつける。

アキオ だけどさ……、

ソノ子 母さんも親戚も最近は諦めたみたいで「嫁に行け」つて

うるさく言わなくなった。妹のユリ子が出戻つてきて勤

めに出たでしよ、孫の世話と私たちに囲まれて「疲れた」

なんて言いながら、かえつてホントは嬉しそう。

アキオ そっか、ならいいんだけど……。

ソノ子 母さんこの間、この小屋をアパートにすれば、私が死ん

だ後もお前たちで暮らしていける、なんて言つてた。

アキオ ふうん……。だけど、なんだかなあ……。

ソノ子 そんな、私のことよりこの地区のこれからのことを考え

た方がいいんじゃない。

アキオ うん。

ソノ子 やっぱり、時代と共に変えていかなきゃ無理よ。

アキオ 俺もそう思う。今度のまつりの反省会に提案してみる。

ソノ子 ウン。そうだね。他に話つて？

アキオ えっ？

ソノ子 それだけ？

アキオ　　そうだけど、
ソノ子　私、またネリのことかと思った。

アキオ　　えっ、何で？
ソノ子　だってアキオ…、私にネリのこと、色々聞きたいのかな、
って…。

アキオ　　まさか。そういえばこの間偶然農協の直売所で会ったぞ。
ソノ子　頑張れば、もしかして、かもよ。彼女、今、心弱つてい
るから

アキオ　　えっ、心、弱ってるって？　元気そうだったぞ。

ソノ子　　そうかなあ…、無理してるんだよ。ネリ、トオル君の小
学校お受験に失敗しちゃったのよ。だから敗者復活で公
立だけど名門の小学校に何とか押し込んだまでは良かった
んだけど…、今度はエリートのだんな様が大阪の、そ
れも田舎の方に転勤、で、単身赴任。

アキオ　　ああ、それで実家に…。
ソノ子　　実家のあるここからなら、地下鉄の駅まで車でトオル君
を送ってあげれば、文京区まで乗り換えなし。田舎に居な
がらにして藩校の流れをくむ名門、文京区立誠之（せい
し）小学校へ通わせられるってわけよ。さすがでしょ、
ネリ。

アキオ　　へーえ、まさに県を超えての越境か。じゃ、ネリと今で
も連絡とってるんだ。

ソノ子　　まさかあ、そんなこと、あのネリが言うわけないじゃな
い。

アキオ　　えっ、そう…。

ソノ子　　短大時代の友達に会うとね、みいんな子育て真っ最中。
アキオ　　でね、お受験考えてるわけ。

アキオ　　だけどネリ、此処はのびのびして子育てにいいっていつ
てたぞ。

ソノ子　　ふふん、まあね。最後の手段の越境通学！

アキオ　　えっ、何だよ、それっ？

ソノ子　　親心よ。国立の小学校の抽選に有利な場所に住所を移し
たり、それが外れたら、公立でも旧藩校の流れをくむ通
学地区に引越したり…、それで最後の手段は越境通学
ってわけ。

アキオ　　そっか、それでネリ…。

ソノ子　　後でネリ、手伝いに来るよ。もう少し待っていたら此処
で会えるよ。

アキオ　　祭りの準備で無理。わかってるだろ。
ソノ子　　ヤダ、むきになってる。

アキオ　そうじゃないさ、だけど…、
ソノ子　あの時もそう。アキオ、むきになって私に「オフエーリ
アキオ　アはお前なんかじゃない」そう言ったんだよ。
ソノ子　えっ？
アキオ　演劇部に頼まれて書いた台本『贋作・ハムレット』。ネリ
ソノ子　が、「普通のハムレットじゃなくて、もつと私達に寄り添
アキオ　ったハムレットにしたい」って言うから…。
アキオ　『東京に行くべきか、それともここに残るべきか、それ
ソノ子　が問題だ』
アキオ　そうそう。
ソノ子　今じゃ、此処に居ながら東京の生活もできる。
アキオ　がらでもないのにアキオ、ネリがいるから演劇部入って、
ソノ子　いきなりハムレット。
アキオ　そういうわけでもないけどな、
ソノ子　おまけになにを勘違いしたか、裏方の私に向かって「オ
アキオ　フエーリアはお前なんかじゃない！」だって…。冗談
アキオ　じゃないよ！
ソノ子　そうだったかな…。
アキオ　マドンナのネリがオフエーリア、そんなこと分かっている
アキオ　って。私は映画研究部だったもの。
ソノ子　だけど演劇部手伝ってたじゃないか。
アキオ　それは台本頼まれたから。頼まれついでに本番の裏方も
ソノ子　やったけど…。
アキオ　悪かったな。
ソノ子　キスしてたんだ。
アキオ　えっ！
ソノ子　アキオ、キスしてた。
アキオ　（ドキツとして）だ、誰と？
ソノ子　ネギと。泥のついたネギと。
アキオ　（拍子抜けして）お、脅かすなよ。
ソノ子　だからだよ。だから私には無理だから断ろうと思ってい
アキオ　たハムレットの台本、東京に近い田舎版にして引き受け
ソノ子　たんじゃないか！
アキオ　えっ？
ソノ子　だって、あの時のアキオ、名画座で見た映画「遠雷」の
アキオ　時の永島敏行みたいだったから。
ソノ子　「遠雷」？
アキオ　ウン、その映画で永島敏行、東京近郊のトマト農家の息
ソノ子　子の役をやってたんだ。まっかなトマトを愛おしそうに
アキオ　キスしてて…、だから、あたし…。

アキオ　えっ、お前、も、もしかして、お、俺のこと……！
ソノ子　バーカ、何うぬぼれてんだよ。アキオのことじゃなくて
さ、この川端地区を背負って生きていくっていう、この
東京近郊農家の、あるべき健全な若者の精神に打たれた
って言うか……、ウン、打たれたんだよ。
アキオ　東京近郊農家の、あるべき健全な若者の精神か……。

影が走る。

「へんねえ、誰かしら？」と呟きながら入って来る吉川（旧・清原）ネリ（39歳）。

ネリ　ごめーん、遅くなっちゃった。
ソノ子　いらっしやい、ありがとね。ネリ、一番乗りだよ。
ネリ　えっ、そうなの？　焦ったよ、遅いと皆に悪いと思つて。
ソノ子　大丈夫、大丈夫。ちよつとずつ始めてるから。
アキオ　おうっ！
ネリ　久しぶり。
アキオ　何言つてんだよ、この間農協の直売所で見かけた。
ネリ　ハハ……、そうだった。
ソノ子　ネリ、これ、此処こうやって……、こう。（作業を教える）
ネリ　ウン、こうやって……、こう……ね。
ソノ子　そう。
ネリ　アキオ、相変わらずネギ作つてんの？
アキオ　ああ、おかげさんで最近やつと軌道に乗ってきた。
ソノ子　凄いなだよ、この間の品評会でアキオんとこのネギが優
秀賞取つたんだ。
ネリ　へーえ、やつたね！
アキオ　やつぱ、俺んとこはさ、ネギとネギの間を広く開けたか
らよかつたんだ。それで空間が出来て、空気の流れが多
くなり真っ直ぐのネギが出来る。よそは一杯収穫しよう
として、隙間なく植えるから、かえってネギの育ちが悪
くなるんだ。
ソノ子　ふうん、それが勝因だね。
アキオ　だけどそれだつて試行錯誤の結晶さ。とにかくうちのネ
ギは青々としてスツと伸びてるんだ。
ネリ　良かったね。
ソノ子　あれっ、ヨウ子ちゃん！　まさか……！

隣家の娘、原田ヨウ子（28歳）が通り過ぎた気がして、ソ
ノ子慌てて戸口の方へ行く。しかし、やはり気のせいだった

のか……。(三人、それぞれのペースで作業をしながら話す)

ソノ子

やっぱり気のせいだったのかな。

ネリ

あたしもね、此処来るとき、ヨウ子ちゃん見かけたような気がして……。だけど……。

アキオ

ソノ子、巫女やるの嫌なもんだから、ヨウ子ちゃんお祭りで帰ってきたら、変わってもらおうと思ってるんだろ。ヤダ、そんなんじゃないけどさ、

ソノ子

また今年も巫女やるんだ。お疲れー。

ネリ

まったく人のことだと思つて、

ソノ子

アキオ、うちのトオル、ネギ食べられるようになったんだよ。

アキオ

へーえ、良かったなあ。

ネリ

ウン。

アキオ

ネギは美味いぞ。それに甘い。煮てよし、焼いてよし。

ネリ

そうそう。

ソノ子

うちの小松菜だつて甘いよ。

アキオ

深谷のネギは有名だけど、なあに川端のネギだつて最高

ソノ子

さ。今に有名に見せる。
(突然)ヨウ子、ヨウ子ちゃん！ ちよつと待って、待ちなさいつたら！

ソノ子、飛び出していく。
驚いて顔を見合わずネリとアキオ。

ネリ

やっぱりヨウ子ちゃんかな。

アキオ

いや、ソノ子の妄想。

アリ

そんな(笑)可哀そうなこと言つて……。

アキオ

それでトオル君、大丈夫なのか？ 毎日東京まで通つて。

ネリ

おかげさまでネギにパワーもらつてます。

アキオ

まだ小学校の一年生だぞ。

ネリ

土、日は近くの河原でたっぷり遊ばせているから、ますます元氣。やっぱり実家に戻つてきてよかった。何てつ

アキオ

たつて、此処はまだまだ自然がたっぷりあるもん。

アキオ

(笑)そりゃあいい。だけど、余計なことかもしれない

ネリ

がたまには大阪へトオル君を連れて行かないと。

アキオ

ウン。そうだね。でないと離婚の危機。

ネリ

まさか。

アキオ

その、まさかが？アキオ、そうなつたらどうしよう？

ネリ

えっ、そうなのか？

アキオ

えっ、そうなのか？

ネリ もしも、もしもよ、そうなったら、アキオ、ちからをかして。

アキオ (戸惑いながら) も、もちろんだよ。

ネリ 約束。でもきつと無理。

アキオ えっ、何で？

ネリ だって、ソノ子に悪いもん。

アキオ 関係ないよ、ソノ子は。

ネリ ところがああるんだなあ、これが。

アキオ 何？

ネリ だからあ、ソノ子とのお祭りコンビ。

アキオ ああ、それは仕方ない、あいつとは祭りの係りだからな。

ネリ アキオ、地域のお偉方の魂胆に載せられちゃダメ！

アキオ だけど俺たちが張り切らなかつたらしょうがないだろ。

ネリ そおかなあ？ だから鼻先に人参ぶらさげられてる馬み

たいにソノ子を追いかけてるんだ。

アキオ まさか(笑)

ネリ だって皆、そう言ってるよ。最近アキオ張り切ってるって。(笑)

アキオ まったく、あいつら、何考えてるんだ。こっちは畑の草

ネリ むしりを後回しにしてまで祭りの準備をしているのに！

フフ、大丈夫。ソノ子だってまんざらじゃないんだから。

だってソノ子、昔からアキオのこと好きだもん。ただ気

づいてないだけ。

アキオ ウソつけ！

ネリ ウソじゃないもん、ホントだもん…。

そこへ、がっかりして戻って来るソノ子。

ネリ ヨウ子ちゃんじゃなかったんだ。

ソノ子 ウン、河原の方まで行って見たんだけど…。もしかして

ミズキのお母さんかもしれないし…、

ネリ えっ、何それ？

ソノ子 最近、お母さんの様子がおかしいんだって。

ネリ えっ、それって…。

ソノ子 そんなわけないか…。

アキオ いや、そうかも。この間も俺んちのネギ畑で…

ソノ子 えっ、やっぱり…、

ネリ ミズキも大変だあ…。

ソノ子 とにかくヨウ子ちゃん、実家へ帰ったのかな、と思っ

お隣りへも寄ってみた。

ネリ　　そう。
ソノ子　お隣のおばちゃん、最近ヨウ子ちゃんと連絡取れないから心配してた。(と、咳)彼氏を紹介するって言って、それきり、(と、咳込む)
アキオ　ソノ子、ホントに風邪ひいたんじゃないのか、さつきも咳込んでいたし。
ネリ　　風邪薬だけでも飲んだ方がいいんじゃない。
ソノ子　大丈夫だよ、喉も頭もいたくない。
ネリ　　それでも…、

そこへやって来る大沢ミズキ(39歳)と村上サユリ(41歳)そして森田オウ子(35歳)。
ミズキはソノ子やネリ、アキオと同級生。農協職員である。
サユリは彼等より二年先輩で元数学教師である。
オウ子はソノ子の妹ユリ子と同級生である。二年ほど前に離婚して、赤ん坊を連れて戻って来た。

サユリ　遅くなつてすみません。
オウ子　うちの子、なかなかお昼寝しないんだもん。
ミズキ　私もすみません。今日は母がデイサービスの日で、いらない間にあれもこれもやることがあつて、遅くなつてしまつたの。
ソノ子　今からだから大丈夫よ。それよか、三人とも久しぶり。
サユリ　そこでね、偶然会つて。
ソノ子　来てくれてありがとう。
アキオ　ヨッ！(と、皆に)
ミズキ　あれえ田谷君、この間はありがとう。おかげ様で助かりました。
アキオ　ああ。お袋さん大丈夫か？
ミズキ　ウン、あの後はおとなしくしてる。
アキオ　驚いたよ、お前のお袋さん、俺んちのネギ畑でうずくまつていたんだから。帰り道がわからないって言つて…。
ソノ子　えっ、そうなの？
ミズキ　うん、まあ、いろいろあつて…でも、何とかやつてる。
アキオ　そっか、遠慮しないで何かあつたら連絡しろよ。まっ、あつたら大変だけどな。
ミズキ　ウン、ありがと。
アキオ　オウ。やっ、もうこんな時間か。神社へ戻らないと。ソノ子、具合が悪くならないうちに早く休めよ。ここは皆に任せて。

ソノ子　ウン、わかった。だけど、あの芸大の先生、どうするの？
アキオ　この調査終わって戻ってきたら、皆に聞いてみてくれないか。調査してもいいっていう家があったらそこへ行

ってもらい、いなかったら俺の携帯にかけてきて。
ソノ子　うん、そうする。じゃ、

アキオ

じゃ、
アキオ、頑張れ！

ネリ、二人だけの合図をする。
戸惑いつつ、出て行くアキオ。

ネリ

ねえ、芸大の先生って？

ソノ子　ウン、アキオがね、神社の宮司さんに頼まれて、芸大の建築科の研究員を連れて来たの。この辺りの農家を見て回ってるのよ。建築学的に見て保存すべきか、研究対象の家をさがしてるんだって。

ネリ

ああ、それで：

その先生、農協の組合長さんの家にも来たみたい。組合長さんそんなこと言った。保存建築とか何とか：、

サユリ

へーえ、組合長さんの家、古くて立派な門構えだもんね。でも大変よ、保存建築になったら。勝手にあちこちリフォームできないし、お金はかかるし：

ソノ子

そんなこと聞いてネリ、家はかかるし：

ミズキ

ヤダ、そんなのめんどくさい。

オウ子

だよね。

サユリ

あたしはちょっと興味あるな。古い建物って素敵じゃない。まっ、うちは古いだけのただのぼろ家だけ。

ソノ子

あたしは早く古い家、取り壊して欲しい。今時和式トイレなんて恥ずかしくて。

サユリ、

オウ子、ミズキ　はい。

ソノ子

ここをこうやって：、こうしたら、お餅を入れて包み込みほどこけないようにして：出来上がり。

サユリ

ええ、こうね。

ソノ子

ウン。

だけど、このお餅、紅いのと白いの、どっちをいれたらいい？
どっちでも。

ミズキ サユリ どっちか一つってわけね。
でも子供の時、キヤーキヤー言っ
て拾ったね。なんか紅いのを拾
うと嬉しくてさ、そう。でもとも
と紅い方を少なくしてるの。ふ
うん。だから子供の頃、偶然紅
いのがポケットの中に入っていた
りすると嬉しかった。ほら、こ
うやって。ね、簡単でしょ。そ
う、思ったよりね。ホント、思
ったより。まさか、難しかったら
私が覚えられないじゃない。そ
れもそうね、元、数学の先生が
そんな心配することないって。
けど先輩、良く決心して此処へ
戻ってききましたね。決心も何
も、此処しか帰る所がないし、
でも、御主人が亡くなっても、
前の奥さんとの子供が三人いる
わけだから。先週の日曜日、う
ちの人の残していったものの全
部、わずかな財産や子供から何
から何まで、あの人の実家に置
いてきちゃった。私って薄情よ
ね。そんなことないよ。しばらく
のんびりするわ。教師の仕事も
ゆっくり探す。そうね。資格あ
るんだもの。うらやましい。じゃ
子供たちは、そこんちから学校
へ？そう、世田谷のお祖母ちゃん
ち。高二的女の子と、中三の男
の子と、小三の女の子。えっ、
大変。そう、大変だった。あれ
は結婚生活というよりまっ、子
守に行ったようなもんだね。と
いうよりお女中様、それも家庭
教師付き。そんなところ、よく
行ったよ。教師だって辞めるつ
もりはなかったけど、難しい年
頃の子供達かかえて、とうとう
辞めざるをえなくなつて。えー、
もつたない。ホント、もつた
ない。高校生の女の子は国立の
付属、中学生の男の子は開成、
一番下の女の子はお受験して
四葉学院の小学部。スゴイ！
入れたわよ、教師辞めてまで
家庭に入ったんだよ。こう

なったら意地だよ。それに…、
それに？
結婚する時、世田谷の姑、なんて言ったと思う？
えっ、何？
津田をお出になつたサユリさんに、三人の子育て務まる
かしら。さあ、お手並み拝見と行きましようかね。だつ
て、
なに、それ。
御主人は？ かばってくれなかつたんですか？
かばうも何も、子守を合法的に確保するために私に求婚
したんだもの。
そんな…！
受験生三人もかかえて…大変だった。けど、そうは言つ
てもあれだね、まっ、一番大変だったのは小学校のお受
験。あれって結局親の試験だもん。
ふうん。そうだ、お受験って、ネリも大変だったよね。
ううん、うちはのびのび育てたいっていうか…、だから
あえて公立って決めていたから。
へーえ、あえてね、そうなんだ。
ああ、それでネリ、ここからわざわざ公立だけど、名門、
誠之小学校なんだ。
お受験じゃないけど、あたしだって…（と、口ごもる）
あたしだって、何？
ウン、みんなそれぞれ色々抱えてこの地区に戻つて来た
んだなあ、って思つて…。
そっか、そうだね。まっ、あたしはサ、ここにいる方が
楽なんだからそうしてるだけだけど。
私はね、まさかこの年になつて、此処へ戻つて来るなん
て思つてもみなかった。只々、立派な教師になろうと必
死で頑張つて…、気づいたら三十路。慌てて合コンとか
行つて…、
えっ、先輩、先輩も合コンとか行くんだ。あたし先輩つ
て結婚しないと思つてた。独りで生きていくかっこいい
女。
まさかあ、いかぶりよ。結婚願望、一応人並みにもつ
てました。だけどダメ。サユリ、この名前がいけないの
ね。父がサユリストだったから。名前と容貌が一致しな
い悲劇かな。っていうか喜劇かな。
サユリ、素敵な名前…。うちの亡くなつた父も憧れの女
性は吉永小百合って言つてたよ。

ミズキ

サユリ

オウ子

サユリ

ソノ子

ミズキ

ネリ

ミズキ

サユリ

ソノ子

ネリ

ソノ子

サユリ

ミズキ

サユリ

ミズキ

ネリ

サユリ

ネリ

サユリ

ネリ

ソノ子
ふーん、キューポラのある町、浦山桐郎か……。うちの会社
の全盛期の頃の作品だな。
サユリ
まず合コンへ行くでしよ。名前は前から聞いてるらしく、
初対面で必ず男の顔色が変わるの。ひどいものになると、
あからさまにがっかりしてるの。もつとひどいものになると、
と、かすかに憐れみの微笑さえ浮かべるヤツがいて、そこ
は見逃せばいいものを「ごめんなさいね。吉永小百合
さまとは似ても似つかず」なんて、勝気の裏返しでほざ
いてしまつて：結果はいつつ、恋までたどり着けず
しぼんでしまい、恋をしないで失恋気分。
オウ子
えーっ、そんな腹立つ！ だけど、せつない……。
サユリ
ウン、せつない。でもそんなこと、今まで吐いて捨てる
ほどあつたから。

ミズキ
でも先輩は、津田に入ったんだもの、やっぱり凄いな！
サユリ
そりゃあ勉強はしたわよ、それしか勝負できないって言
うか……。勉強だけは裏切らないもん。
オウ子
凄いな。あたし勉強って大嫌い！ 努力や、我慢ってい
う言葉も。
ミズキ
オウちゃんたら、正直なんだから。
サユリ
そうこうしていたら、ある日十三歳年上の同僚教師にい
われたの。「もう合コン行くこと無いよ、一緒にしろ」
って……。

ミズキ
わあ、素敵なお話じゃないですか。ドラマみたい。あた
しなんか見合いですよ。ただの見合い。結局、実家へ戻
って来ちやつたけど……、
サユリ
そんなこと言われたの、サユリさん初めてだったから、
すっかり舞い上がっちゃつて……。だけどそいつ、女房に
逃げられて結婚相手というよりは子守を探していただけ
なのよ。問い詰めると「今頃気づいたのかバーカ、お前
が合コンに行くたびに『梅子が来た！』って皆からお
それられていたのを、俺が見るに見かねて救つてやつた
んだぞ、慈善事業だ、ありがたく思え！」だって。
ネリ
何それ、梅子つて？ そつか津田だもんね。（思わず吹き
出して）津田梅子！

サユリ
だけど、こんなに早く死んじゃうなんて思つてもみなか
つた……。癌つて言われてからホントあつという間……。
ネリ
でも先輩帰ってきてくれて嬉しいな。いずれうちのトオ
ルの家庭教師お願いしましす。
ソノ子
ネリつたら、ちゃっかりしてるんだから。
ネリ
フフ……。ついでに三人の子供達も引き取っちゃつたら。

開成だったら世田谷より、こっちの方が近いかも。それに四葉学院小学部だってここから地下鉄で乗り換えなし。

ソノ子

サユリ

ネリ、無責任なこと言わないの。ホント、やっと二十四時間全部自分の時間になって、ホッとしているんだから。教師の口も、これからじっくり探そうと思ってるの。

ネリ

サユリ

まさか、むしろ、せいせいしています。それにこの地区、男がいないから気をつかわないで済むし、ホント平和。そうそう、伸び伸びできる。

ソノ子

オウ子

ダメですよ先輩、そんなこと言っちゃ。男の人がいるからこそあたし達頑張れるんじゃないですか。

ソノ子

オウ子

あーら、今さら何を頑張るの？

ネリ

オウ子

それは：、ネリ先輩、先輩も何か言ってくださいよ。何かって、あたしはそんな：、頑張って来たわけじゃない、ただ：、

サユリ

ミズキ

フン、さっぱり、すっきり、ゆっくりぽんヨ。

サユリ

ミズキ

亭主がいないからさっぱり、恋人がいないからすっきり、男がいないからゆっくりにできるってこと。

ミズキ

サユリ

あつ、それ私もわかります。

サユリ

ミズキとサユリ

さっぱり、すっきり、ゆっくりぽん！

ソノ子

ミズキ

そんなこと言ってミズキちゃん？ ミズキちゃんこそどうなの？

ミズキ

ソノ子

どう、って？ 最近、再婚をすすめられることもなく、やっとホッとしています。

ソノ子

ミズキ

だからさ、戻ってきててもまた農協へお勤めしているじゃない。それって、この地区にこだわりつけているから？

ミズキ

ソノ子

こだわっているわけじゃないけど、やっぱりここは穏やかだもの。それに母の介護で、デイサービスの日は、迎

ミズキ

ソノ子

えの時間までに早退させてくれたり、色々助かっているの。この間も母が徘徊して：、でも地区の皆に助けられて、何とかやっています。

ネリ

ミズキ

そうなんだ：、でも退屈じゃない？

ソノ子

オウ子

そんなこと：、むしろ感謝してるんです。

オウ子

私は住むのは田舎、会社は東京。だからバランスって言うの、そういうの上手く取れる。

オウ子

あたしなんか、此処に戻って来た時は「東京へ帰りなさい

ネリ

ソノ子

ミズキ

い「お前が堪えしようがないんだ」「姑の言う事は我慢して聞いてればいいんだ」とか「男なんてそんなものだ」なんてシャワーのように言われたけど、今はもう……。だってお父ちゃんもお母ちゃんも孫と暮らせるんだよ。あたしは東京へお勤めに行ける。短大時代の友達と遊んで帰ってきたって、お父ちゃんが車で駅まで迎えに来てくれる。こっちの方が楽ちんで、みんなハッピー！

ネリ！

確かに、退屈って言えばそうかもしれないけど、母と二人、心静かに暮らしていけるの。みんなと違って私、大

サユリ

ミズキ

そんなこと関係ない。そうかなあ……。あの頃父が亡くなって経済的に不安だったから……、

ソノ子

ミズキ

ソノ子

ミズキ

だけど皆、人それぞれだから。自分の身の丈っていうの……。そういうのを……、

サユリ

ミズキ

ソノ子

ネリ

私なんて何年ぶりかで帰ってきたら、あまりにも東京が近くてびっくり。

ミズキ

オウ子

それでいて自然がいっぱい。だよね。あたしもトオルに自然の中でのびのびと遊ばせてあげたいと思ってるね、帰って来たの。

ネリ

オウ子

素敵ですね。でも何故、こっちの小学校へ転校しないの？ 通学、大変でしょう。

ネリ

オウ子

トオルが、社宅の頃のお友達と離れたくないって言うのよ。皆近くの小学校に入学したから。

ミズキ

サユリ

こっちへ転校したって友達、すぐできるよ。うーん、トオルは人見知りだから……。だったらあたしが最寄り駅まで運転頑張ろうかな、と思ってる……。

ネリ

サユリ

ふうん。大変だね。田舎に居ながらにして、国立や私立の名門小学校並みの教育を受けさせる。ネリ、いいんじゃない。美味しいとこどりで。

サユリ

ソノ子

いやだ、先輩ったらあ……。だってあの小学校、越境通学生かなりだった。さすが元教師。お受験事情よく知ってる。

サユリ

そりゃあ、一生続けるつもりだった教師の仕事、やめて

まで家庭に入ったんだもの。だったら受験生の母として完璧を目指さなきゃ。

凄しい。

サユリ けど、親として一番大変だったのは小学部へのお受験ね。だからお利口さんのネリは避けたんだ。そうでしょネリ。う、うん、まあね。

そこへソノ子の妹、ユリ子（35歳）が、澤村を連れてやって来る。その洗練された容姿に、ソワソワする女達。

ユリ子

お手伝い、ご苦労様です。お姉ちゃんごめんね。遅くなつて。ちよつと先生を案内していたから。

澤村

ありがとうございます。おかげでゆっくり拝見させていただきました。

ソノ子

そうですか。お力になれてよかったです。（皆に）こちら先程お話したでしょ。芸大の澤村先生。研究に協力してくれるお宅をさがしているそうなの。誰かいらない？

澤村

先生だなんてとんでもない、ただの研究員です。今日はざつと拝見するだけですからお手間はとらせません。

ミズキ

あ、あの：、うちで良かったら、どうぞ：。

オウ子

あつ、うちもお願いしたい。

ネリ

うちも、大丈夫です。ネリ、あんたはさつき、めんどくさいって言うたでしょ。

ネリ

いいのよ、一度調べてもらいたいと思つていたの。先生、お願いします。

澤村

そうですね。ありがとうございます。ではどのお宅から？

ソノ子

じゃ、一番最初に手を挙げたミズキちゃんところから。で、いい？

ミズキ

あつ、私最初でいいんですか？ でもうち農家の作りじやなくて：、父が公務員だったから普通の家です。玄関

澤村

の横に小さな応接間があつて：、和洋折衷様式ですね。昭和初期に人気があつた物件です。嬉しいなあ。この地域では珍しいですよ。文京区の西片

ミズキ

あたりの学者達が好んで建てましたが、今は数少なくなつています。

澤村

でもうちはそんなお屋敷じゃなくて：、いいんです。お屋敷を調査しているのではなくて普通の

ミズキ

家を調査しているのですから。そうですね。

ソノ子　じゃ、ミズキの家の近くがネリの家だから、調査が終わりそうになったらミズキ、ネリに携帯かけてよ。
ネリ　お願いヨ。
ミズキ　うん、そうする。
オウ子　そんな次はうちだからね。
澤村　さあ、行きましようか。
ミズキ　はい。

ミズキ、澤村に促されるようにして出て行く。
また影が走った。

サユリ　ふう、ミズキちゃん、いつもはおとなしいのに、ちよつと、今の何？
ネリ　さあ、あの先生イケメンだから？
オウ子　フフ：ミズキちゃん、やるね。ああいうタイプってきわどい小説、サラッと書いていたりして：。それとも、もしかして今夜あたり、シラーつと芸術家の DNA もらっちゃうかもよ。

ユリ子　うわあ、いやだあ：。あたしもね、聞いたことある。ほら、ちよつと前に流行った携帯小説、あれって、夫にかまってもらえない主婦や、まじめそうなオフィス・レディとか、学校の先生：。
サユリ　えっ、私？　ないないない、そんなこと。
オウ子　だよねえ。

サユリ　そんなこと言ってお前さんこそ、まさかあ、あたしは彼氏いるもん。
オウ子　へえ、オウ子、抜け駆けなしだからね。
ユリ子　そんなことわかんない。

オウ子　あたし達って、百合と桜。学年も一緒、就職も一緒、結婚した頃も一緒、赤ん坊産んだ頃も一緒、別れた頃も一緒。ゼーんぶ一緒だったじゃない。
ユリ子　違うよ、分かれた理由が違うよ。あんたは旦那の浮気、あたしは、あの姑だもん。

オウ子　そんなのあんたの我儘、どんな男にだって母親はいるよ。しかも大概の男は皮むけばみんなマザコン。
オウ子　しよつちゆうやって来るんだよ。そいでもって、金は出さずに口を出す。
ユリ子　亭主に、浮気されるよりいいじゃん。

オウ子　やってきちゃあ、「長生きするとオウ子さんに悪いから、死にたい、死にたい」って言いながら、いつだってヨ

ソノ子　グルトにきな粉をかけて食べてんの。

オウ子　何、そのきな粉って？

だから、きな粉って大豆から出来てるんだよ。大豆は長寿の源！

ソノ子　へえ……。〈笑い〉

オウ子　だけどあたしが本当に我慢できなかったのはね、そんなことじゃないの。そういう姑に反論しない亭主にがっかりしたから。

ソノ子　二人ともよしなよ。

オウ子　そんなこと言ったって……、ユリが人の恋路を邪魔することを言うんだもん。

ユリ子　へーえ、そいでどんな男？

オウ子　フフ……

ユリ子　おい、もったいぶるなよ。

オウ子　十三歳離れてる。

ユリ子　えー、爺か。ということとは四十八。

サユリ　悪いことは言わない、止めなさい。

ユリ子　介護の道まっしぐら。それより、その若さで未亡人になつたらどうするの。

オウ子　フフ、ユキオね、うちに入ってもいいよ、って言ってくれた。ほら、家、お兄ちゃん夫婦出て行っちゃったでしよう、だから……

ユリ子　そんな爺が来たって迷惑なだけだ。

オウ子　だからね、爺じゃないってば。年下です、年下！

ユリ子　ということとは……、えっ、二十二！

オウ子　そう、二十二！

ソノ子　止めときな、遊ばれてるだけだって。

サユリ　それだっさい。遊び返してやろうじゃないの。オウ子、

若い男ゲットする方法、伝授して。それも今すぐ。

オウ子　フフ……、そんなのわかんない。

ネリ子　本当に婿に入ってくれるのかなあ？

オウ子　ウン。早く一緒になりたいって……だけどあたし、ちよつ

とだけじらして楽しんでるんだ。だって今が一番楽しい

んだもん。

ユリ子　オウ子つたら！

そこに携帯音
慌ててバックから取り出し話すサユリ。

サユリ　はい、お母様、先日は……、その後……えっ！　それで見つ

：、もしかしたら前の奥様の所へ行かれたのではないでしようか？　：ええ、何と言つても産みの母親ですし…、まさか、そんなこと…。だって、あの子たち、私の実家なんて知りませんよ。聞かれたことだってありませんし：、そうですか？　もしも、もしもですよ…。はい、とにかく私、携帯、離さず持っていますから。はい、では。

先輩、何か？

子供達、世田谷の家を出たらしいの。

じゃ、此処へ？

まさか、そんなこと！

もしかして、産んだ母親の所かもしれないし…、

まさかあ、自分たちを棄てた母親に会いに行くかなあ…。

でも心配ね。ここはもういいから、家へ帰ったら。もし

も、つてこともあるかもしれない。

そんな…、だってあの子たち、ちつとも私になつかなか

った。というより、いっつも私に反抗的で…。教師辞め

てまであの子たちの母親になろうとしたんだけど…：なか

なか…。難しかった…。

でもさあ…、

もしも、もしも家に来たなら、うちにいる母さんが携帯

に掛けてよこすから。

そっか、そうだね。

ええ。さあ、作業続けよう。まだまだ足りないよ。

ウン。

そこへサナエが母屋からやって来る。

コヤの回りをうろうろしていたヨウ子、隠れる。

サナエ　あれ、ヨウ子ちゃん？　さあ皆さん、お疲れ様、お茶に

しましよう。(茶の用意をしながら)

あつ、ありがとう。母さんも見た？　やっぱりヨウ子ち

ゃんかなあ…、

ウン、何かそんな気がした。

でもヨウ子ちゃんは、住み込みで美容師やってるんだよ。

お祭りだから戻って来るわけないよねえ。

あれっ、聞いてない？　そこはもうとつくにやめた。髪

染めの薬にかぶれちゃって美容師はあきらめたんだって。

それ、前にあたしも聞いたことある。エステだよ、きつと。

こうなったら仕方ないからエステシヤンの養成学校に行

ユリ子

オウ子

サナエ
ソノ子

ソノ子

サナエ

ソノ子

サユリ

ソノ子

オウ子

サユリ

サユリ

ソノ子

ユリ子

オウ子

サユリ

ユリ子

サユリ

ソノ子

ネリ かせるって、お隣のおばちゃん言ってたもん。
ふうん、エステか…、あれ、気持ちいいよね。

サナエ でも違うかな。大きなお腹突き出して、あっちの方へいったもの。

オウ子 でも…、もしかしてそうかも。ラージポンポン・インハラベイビー。

ユリ子 オウ子、ふざけないで！

ネリ 家の前まで来たものの…、入れないで、それでここに…、ちよつと、憶測は不味いよ。

ソノ子 そうね。母さん、あの子まだ眠ってる？

ユリ子 それがさ、今頃になってやつと寝付いた。だから手伝いに来たんじゃないか

サナエ やだ、あの子、お客さん来てたから興奮して…、（段ボールをのぞき込んで）おっ、結構、出来上がってますね。

ソノ子 うん、大分ね。だけどまだまだ…。（と、咳込む）

サナエ まあ、やだよ、こじらせたら大変、今夜は早く寝なさいよ。

ソノ子、しばらく咳込むが、やがて落ち着く。

サナエ、茶を出したり、サト子からもらったふかし饅頭を出したり、皆を取り持って、おやつタイムとなる。

そわそわと落ち着かないサユリ。

サナエ さあさ、お茶、お茶。やりながらでいいけどさ、ちよつと手を休めて。はい、これ（ふかし饅頭）もね。

オウ子 いただきます。

サナエ はい、どうぞ。
わあ、美味しい、このお饅頭。

サナエ ネリちゃんところから頂いたんだよ。
ヤダ、お母さんてこんなもんばかり作って近所中に配ってるの。止めて、って言うのに…、

ユリ子 そんなこと無い。美味しいじゃん。
ホント恥ずかしい…。

サナエ あの芸大の先生、結局こっちは見ていかなかったんだね。
ウン、こんな小屋、見るほどのものじゃないからね。

ソノ子 それであの先生、母屋のこと、なんか言ってた？
ウン、なんか難しいことを言ってた。ええつと…ユリ子、

サナエ なんだっけ？

ユリ子 重要文化財になると、絶対手を加えられないから、建て

替えるならいまのうちだし、もし重要文化財として残したいなら、申請書類を提出しなければならぬ。希望するなら、その書類を作成してくれる。ふうん。

サナエ
ユリ子
サナエ

だから要するに、重要文化財じゃなく、快適な生活を為には、母屋を建て替えればいいって言ってるの。それは無理。そんな気なんてさらさらない。だってこれで十分なんだから。もし建て替えるなら、このコヤだね。いづれ私が死んだら、お前たちは母屋に住んで、此処をアパートにして暮らすといいよ。それなら建て替えて、あの先生にお願いしてもいいんだから。でもあの先生、古い建物の調査に来たのに建て替えを進めるなんて、変わってるよね。

ネリ
ソノ子
ネリ

そうだね。研究対象が少なくなるもん。でも親切に私たちのことを考えてアドバイスしてくれたんだ、きつと。そっか：、アパート悪くないよね。母さんに話してみる。

オウ子

これからはこの地域、いくらでも需要があるから。うちもあの先生に見てもらって、建て替えるようにアドバイスしてもらおうと。

ユリ子

何言ってるの、年下の彼が入ってくれるんでしょ。それからでいいじゃん。

オウ子

あら、だからその前にしたいんじゃない。そっか。

ユリ子

突然サユリ、決心したように立ち上がる。
驚く周りの者たち。

サナエ
サユリ

あれサユリちゃん、どうした？
いえ、何でも。お茶（取り繕って）お茶、どうもご馳走様。

サナエ

あっ、いいんだよ。皆久しぶりじゃないか。ゆっくりお茶を飲みながら作業していいんだからね。

ソノ子

そうそう。でも、やっぱり子供達、心配よね。

サユリ

ううん、法律的には、もう何のつながりもないんだ。第一全然血が繋がってない。

ソノ子

でもさあ：、
でも、でも：、私やっぱり！

サユリ

突然、サユリ戸口を出ようとして一慌てて隠れようとしたヨウ子と鉢合わせ。

はち切れんばかりの腹である。

サユリ ヨウ子ちゃん！

みんなも一斉に立ち上がり「ヨウ子ちゃん！」
ヨウ子、わっと泣き崩れる。
サユリ、ヨウ子を抱きかかえながら皆の方に連れてくる。

サユリ

そんなに泣かなくなつて大丈夫。

ヨウ子

だつて：、（泣きじゃくる）

ソノ子

もう心配ないよ。

ヨウ子

でも：、

サナエ

さあ、こつちへきて、お茶でも飲もう。落ち着くよ。（と、

茶を淹れる）

ヨウ子

（こつくりする）

サユリ

（茶を渡し）熱いから気を付けて。

オウ子

サユリ先輩、行かなくていいんですか？

サユリ

やっぱいい。ここにいる。ここにいるってことに決

めた！

ネリ

そっか：、そうだね。

ソノ子

ヨウ子ちゃん、このお饅頭、食べてみない？

ヨウ子

（少しおさまり）いいんですか？

ソノ子

うん、どうぞ。

ヨウ子

（口に入れ）甘い。（泣き笑いの顔で）

サナエ

どんなに辛いことがあつてもさ、美味しいものを食べる

ヨウ子

と、辛いことを忘れることが出来るよ。

ヨウ子

うん：。哲っちゃんが結婚しようつて：、

サナエ

えっ、ああ、お隣の奥さんから聞いたよ。

ヨウ子

なのに哲っちゃんには別の女の人がいたの。夢を目指し

ヨウ子

て頑張ろうつて：。哲っちゃんね、ミュージシャン目

サナエ

指してるの。だから居酒屋『のん兵衛』で一緒にお運び

サナエ

さんして頑張ったのに、なのに：、

ヨウ子

あれっ、居酒屋つて：、エステサロンじゃないのかい？

ヨウ子

：そうだったんだけど：一年前に辞めたの。

ユリ子

えっ、如何したの？

ヨウ子

だつて、配属されたエステサロンは青山とか、白金とか

ユリ子

じゃなくて下町。そいでもって、おばちゃんが夕飯の買

ユリ子

い物帰りに寄るようなお店で、買い物駕籠からネギなん

ユリ子

か覗いてて：、

ユリ子

だからって、ヨウ子ちゃん：、

ヨウ子 だって、匂うんだよ、ネギが！ せっかく美を追求する
為に美容の世界に入ったのに…、それに、それに…、

ソノ子 それに、どうしたのサ？
ヨウ子 毎日毎日、下町のデブお婆さんのぶよぶよなお腹を揉んでるの、もうウンザリなんだよ！

オウ子 (笑) そうだよ、美を追求するんだもんね。
ヨウ子 だから今度はネイリスト目指して…、だけど、もうお母ちゃんには心配かけたくなかったから、ネイリストの学校の入学金貯めようと…、

サナエ ああ、それで居酒屋『のん兵衛』か。それで…、
ヨウ子 うん、なのに哲ちゃんたら… (また泣く)

サユリ 辛かったねえ、ヨウ子ちゃん。だけどそのお腹…、
ヨウ子 十か月。

全員 十か月！
ヨウ子 大丈夫、予定日まであと一週間あるから。

サナエ それにしたってヨウ子ちゃん…、
ヨウ子 あたし、どうしていいか分からなくて…、ずっと歩いて

オウ子 …お母ちゃんにはこんなこと、絶対知られたくないのに、
サナエ だけどなぜか足がここへ向いてしまうの。

ネリ もう隠せないよ。
サナエ そうね、でも何とかならないかなあ…。
ソノ子 何とかならないから結局此処へ帰ってきたんじゃないか。

サナエ ヨウ子ちゃんのお気持ちがもう少し落ち着いたら、一緒にお隣へ行ってあげる。とにかくこのままじゃどうしようもないよ。

サナエ それがいい、私もついていってあげるからさ。どっち
ヨウ子 みち隠しとおせるもんじゃないよ。
サナエ ありがとう (と、また泣く)

そこでネリの携帯が鳴る。
ビクツとするヨウ子。肩を抱くサナエ

ネリ はい、あっ、ミズキ、ウン分かった、じゃ、すぐ行く。

ソノ子 …ウン、分かった、伝えとく。

ネリ 今の、ミズキ？
ソノ子 (帰り支度をしながら) ウン、じゃ、あたし行くね。あ

っ、それからミズキ、お母さんがデイサービスから早めに帰って来ることになったから、こっちへ戻って来るのと出来ない、って。申し訳ない、って言った。

ソノ子 分かった。じゃ、ね。

ユリ子 私も母屋へ戻る。あの子、そろそろ起きる頃だから。
サナエ そうだね、いったほうがいい。
ソノ子 じゃ、残った者で、また作業始めようか。
オウ子 うん。
ソノ子 サユリ先輩は無理しないで。
サユリ ありがとう、でも平気よ。

ユリ子とネリ、去る。
残った者、それぞれ、作業を始める。
ヨウ子、戸惑いながらも手伝おうとする。

サナエ ヨウ子ちゃんは休んでて。
ヨウ子 でも…、
ソノ子 気がまぎれるならやってみる？
ヨウ子 ウン。
ソノ子 となりの母さんの見てればわかるよ。
ヨウ子 はい。
サナエ (ヨウ子に) いい、こうやって…、
ヨウ子 はい。
ソノ子 それで、ヨウ子ちゃんが家へ帰る気になったら教えて。
ヨウ子 だけど無理はしないでね。
サナエ ウン。
ヨウ子 可愛い孫が生まれてくるんだ。大丈夫さ。それに、もしも親が認めなくなったら、皆で、この地区皆の子供としてヨウ子ちゃんの赤ちゃん、育てればいいのさ。
ヨウ子 おばちゃん…。(と、また泣く)

サナエ、ヨウ子の肩を抱く。
そこへ、水分(みくまり) 神社の宮司、水野ハルヒコ(65歳)が飛び込んでくる。
慌てて奥に隠れるヨウ子。

ハルヒコ いやあ、申し訳ない。大変なことになってしまった。
サナエ あれ、また血相変えてどうした？
ハルヒコ ここへ、芸大の先生が来ただろ。
オウ子 ええ、とつても素敵な方、皆であるDNAをもらいたいって話してたの。
ハルヒコ えっ？
ソノ子 まさか、オウ子の願望、冗談です。
ハルヒコ 知り合いに頼まれてこちらに紹介した先生なんだが、

ソノ子 ええ、アキオが連れてきましたよ。芸大で、おまけにイケメンだから皆舞い上がっちゃって……、皆って、先輩も含めてですよ。

オウ子 あの先生、どうかした？

サナエ どうもこうも、あの先生、古い建物の研究と称して、そういう物件を保存するのではなく建て替えるために下調べに回っているようなんだ。

サナエ ああ、そう言ってた。うちもね、此処のコヤを建て替えるように思ってた……、

サユリ あの先生、本当に研究者なんですか？

ハルヒコ 確かに以前は芸大の研究者だったんだが今は……、どうも古い建物を見て回り、保存をすすめるながら実は不動産屋に情報を流しているらしいんだ。

全員 えっ！

サユリ やっぱりね。最近の不動産屋は手が込んでいるね。

ハルヒコ うっかりできないよ。皆が取り壊しにサインしたら困ると思つて、大急ぎで来たんだ。

サナエ 大丈夫だよ。建て替えなんて、パツと決められるもんじやないから。

ハルヒコ ならいいんだが……、とにかく驚いて……いやあ、申し訳ない。

サナエ たいしたことないって。それより明日の祭りの準備の方、大丈夫？

ハルヒコ それはもう……、男衆が頑張ってくれてるから。

サナエ 爺さんばかりで。

ハルヒコ まっ、そんなとこだ。

ソノ子 そうだ。その先生、ミズキとネリの家辺りにまだいるかもしれない。

ハルオ えっ、それは大変だ！

ソノ子 うん、多分。

ハルヒコ 急がんと、じゃ。

慌てて出て行く宮司のハルヒコ。
あつけにとられているソノ子たち。
奥から出てくるヨウ子。

サナエ ヨウ子ちゃん、大丈夫よ。

サユリ あーあ、騒々しい。

ソノ子 せっかく宮司さん来たのに、あんなに急いでいるんだもの。相談しそびれちゃった。

オウ子 相談しそびれたって？
ソノ子 だから、毎年毎年の巫女のことよ。
サナエ またその話、ソノ子まったく罰当たりなこと言って…、

と、そこへ入って来るアキオ。

アキオ 皆さん、手伝いありがとう。あつ、村上さん、
サユリ はい。なにか？
アキオ お子さんが三人、神社に訪ねてきました。
サユリ (動揺して) えっ、それで？
アキオ 俺の車に乗せて、今、此処の母屋の方に、
サユリ ありがとう！

サユリ、アキオの話も聞かず、母屋の方に飛び出していく。

ソノ子 あつ、ちよっと待って。

ソノ子、飛び出していったサユリを追いかけようとして、ネギの束を運び込むアキオとぶつかりそうになる。

ソノ子 何、これ？

ネギ。

ソノ子 ネギ、そんなことわかってる。

アキオ うまいぞ、焼いて食ったら絶品だ。風邪なんかあつとい
う間に治つちやうぞ。(次々と運び込む)

ソノ子 こんなにたくさんどうするのさ！

アキオ これ、これ。こいつがきくんだ。(奥から何かを取り出す)

ソノ子 臭っさーい！ 何それ？

アキオ ネギみそ手拭い。とっておきの風邪対策さ。

アキオ、長ネギの中に焼きそを入れて手ぬぐいで巻いたものをソノ子に差し出す。

アキオ これ、首に巻いてみる。咳、ばっちしなおるから。ほれ。
ソノ子 やめてよ！

逃げるソノ子に、アキオはしつこくソノ子の首にその手ぬぐいを巻こうとする。
ソノ子、逃げようとして机の角にぶつかる。

ソノ子 いたーい！
アキオ (支えようとす) 大丈夫か、オイ。
ソノ子 (振り払って) ちよつと、いい加減にしてよね！
アキオ えっ？
ソノ子 調子に乗るのやめてくんない！
アキオ 別に、調子になんか…、
ソノ子 きもいんだよ、何、色男ぶってんのさ。芸大のあの先生
アキオ に対抗してるわけ。けどあの先生も眉唾物らしいよ。
アキオ な、何だよ、俺がせっかくソノ子の為に…、
サナエ (それとなくとりなす) アキオ、ありがとね。こんなに
杯入れて。助かるう、うちは夏でも鍋やるのよ。ネギー
アキオ そうすか。暑い日に汗いっぱいかきながら鍋やるのって、
サナエ あれ最高ですよね。
ソノ子 祭りが終わったら、鍋パーティーでもやろう。皆を呼んで。
サナエ 母さん、打ち上げはやるよ、宮司さんここで！
ソノ子 なあにソノ子、それとこれとは違うよ。それに飲み会な
んか何度あったっていいだろう。
オウ子 飲み会、賛成、
サナエ ほおれ。アキオ、女ばかりに囲まれて、ハーレム気分
アキオ させてあげるでね。
ソノ子 ハハ、いいっすね。
アキオ アキオ、何鼻の下のばしてんのさ。いい気なもんさ。
サナエ 俺がいつ鼻の下伸ばしたって言うんだよ！
ソノ子 そうだよ、ソノ子、
母さん！

あわや一触即発といったところに、サユリ戻って来る。

サユリ 途中で悪いけど…ゴメン、帰る。
ソノ子 そんなこといいけどそれより…、
サナエ 子供たちどうだった？
サユリ ウン、取り敢えず、家へつれていくことにした。
サナエ 世田谷の方、心配してるでしょう。
ソノ子 そうだね。
サユリ さつき携帯で話といた。
サナエ やっぱりお母さん恋しくなって、
サユリ (かぶせて) そんなんじゃない、ただ、世田谷じゃ窮屈
アキオ なんだよ。
アキオ それでもよかった。

サユリ アキオ君、子供達連れてきてくれてありがとう。
アキオ いや、あっ、送っていくよ。
サユリ ありがと、でも大丈夫。あの子たち、田舎道歩きたいんだって。それに明日のお祭りも見たいって。

アキオ そっか。
サユリ 取り敢えず午前中はお祭りを見せて、それから世田谷まで送ってく。

サナエ それがいいよ。なんだかんだ言ったって、一度はお母さんて呼んだんだから。

サユリ それない。呼ばれたことなんて一度だって…、だけど、まっ、田舎珍しがってるから、そんぐらいしてあげようかなって…。

ソノ子 ウン。

サユリ じゃ、ありがとね。また連絡する。

サナエ 気を付けてお帰りヨ。

サユリ はい。ありがとございました。

サユリを見送って、残された者達（ソノ子、サナエ、アキオ、オウ子、ヨウ子）なぜかホッとした思いである。

ソノ子 さっ、午前中にはばらまくのは取り敢えずこれでオッケー。後は午後からの分。

アキオ 俺、出来上がってるの神社へもっていく。

ソノ子 そうだね。

オウ子 えー、残り、まだまだだよ。なんか終わりそうもないよ。

サナエ なんだかんだで皆帰っちゃったし…、

大丈夫だよ。いざとなったら残りの分は夕飯食べてからソノ子と二人で作ったっていいんだから。母屋でテレビ見ながらさ。

ソノ子 何言ってるのさ、母さん。（と、咳込む）オウちゃんも帰ったっていいんだよ。その年下の彼氏さん、待ってるかもしれないよ。（また、咳）

オウ子 フン、そうかも…。

サナエ ソノ子、無理するんじゃないよ。

アキオ ほれ、だからこれを、（と、みそ手拭いを差し出す）

ソノ子 アキオ、しつこいんだってば！

アキオ だけど…、

ヨウ子 あっ、それ、あたし風邪ひいた時、いっつもお母ちゃん

やってくれた。臭いけど効き目あるから。

アキオ

サナエ そうだよ、やってもらうといいよ。
 ヨウ子 そう。ホント、未来のダンナさんなんだから。
 ソノ子 えっ、未来のダンナ？
 オウ子 でしょ？ 未来のダンナさん。（思わせぶりに）
 ソノ子 じよ、冗談じゃない！ アキオとはただのクラスメート、
 手も握ったこともなければ、喫茶店行ってコーヒー一杯
 飲んだこともない。
 オウ子 えっ、そうなんだ…。
 アキオ そ、そうさ。
 ヨウ子 だけど電話でお母ちゃん言ってたよ。いずれ、あの二人
 は一緒になるよって。毎年毎年、水分（みくまり）神社
 の係りをやってるからって…。
 オウ子 でしょ、でしょ。
 ソノ子 係りって…、誰もいないからやってあげてるだけなのに
 …、だからって…、
 オウ子 あたしもそんなウワサ、聞いたことある。だから、てっ
 きり…。っていうか、この地区の皆がそう仕向けてるっ
 て言うか…、ウン、きつとそうだよ。
 ソノ子 冗談じゃない！
 サナエ ソノ子、そう怒るもんじゃないさ、ありがたいことじゃ
 ないか。ねえ、アキオ君。
 アキオ は、はあ…、
 サナエ まっ、こんな鼻っ柱の強い子だけどさ、なあに優しいと
 ころもあるんだよ。
 アキオ はい、それはもう…、
 ソノ子 アキオ、なに判ったような口きいて…、
 アキオ いや、だから何も…、
 ソノ子 大体がさ、「オフエリアはお前なんかじゃない」って言
 いやがってたお前がさ、おまけにネリの猫なで声に騙さ
 れて尻ばっか追っかけてたお前が、なんで今更まんざら
 でもないって顔してんのさ。
 ソノ子 ソノ子、よしなさい。
 サナエ 母さんたちも母さんたちだ。残り物には福があるって言
 って、お祭りを利用して、アキオとソノ子をくつつけち
 やえ、なんて、あんまりじゃないか！ それに載せられ
 てその気になってるアキオもアキオだ！
 ヨウ子 ソノ子お姉ちゃんどうしたの？何なの、何でそんなに怒
 っているの？ あたしが変なこと言ったから？ ごめん
 なさい、だけどあたし…、痛い、痛い！
 サナエ ヨウ子ちゃん、大丈夫？

ヨウ子 大丈夫じゃない、いたいよー、なんか：生まれる、助け

て、ああ、生まれそう！

サナエ ヨウ子ちゃん、大丈夫だよ。おばちゃん、付き添ってやるからね。

ソノ子 救急車、じゃない、アキオ、車、車に乗せよう。とにかく

く病院、隣町の生方産院だよ。

アキオ う、うん。

ミユキ 痛い、痛い、痛いよー！

バタバタとした戸惑いの中で、暗転。

―数時間後―

暗闇の中、元気な赤ん坊の泣き声。

―舞台、明るくなると―

呆けたように座っているアキオとソノ子。

それでも無意識のうちに、作業を進めている。

ソノ子 三千八百五十グラムだつて：。

アキオ ウン。

ソノ子 お隣のおばちゃん、

アキオ 驚いたなあ：。婿なんていなくなつて、そんなことどう

だつていい、ヨウ子が産んだんだからうちの子サ。うち

ソノ子 の子だから、うちで育てる、だと。

母さんも言つてたじゃない、もしも隣がダメと言つても、

アキオ この川端地域の皆で育てるから大丈夫、川端っ子だつて。

ソノ子 そうだな。まさにアマゾネス。

アキオ フフ：、アマゾネス。(と、くしゃみ)

ソノ子 結局皆帰っちゃつて、俺たちだけだな。

アキオ しょうがないよ。(と、くしゃみ) もう夜だもん。

ソノ子 そうだな。病院の帰りに神社へ寄つて、事情話しておい

アキオ たから、後の残りは明日までに届けられればいいんだ。

ソノ子 ウン。母さんが、さっきそこへおにぎり置いてつた。区

アキオ 切りのいいところで食べて、だつて。

ソノ子 ウン。

アキオ でももうちょっとやろうか。(と、くしゃみを立て続けに

ソノ子 三回)

アキオ そうだな。昼すぎに撒く分までな。

ソノ子、側にあつたボックス、ティッシュからティッシュペ

ーパーを取り出し、派手に鼻をかむ。

アキオ、ネギみそ手拭いを出そうとして思いとどまる。

そこへソノ子の携帯が鳴る。

ソノ子

（出て）はい。：ウン、大丈夫。：そう、帰り道そんなに喜んだんだ。：獅子舞は十時から、えっ、私、私の巫女舞は十一時。：うんだいじょうぶ、焼きそば係なんて、どうにでもなるから子供たちに付き合っつてやんなよ。：そう、なら助かるけど。：わかった。お昼過ぎは代わりに者、手配してあるから大丈夫。：子供たちを世田谷までちゃんと送り届けてよ、ね。：うん、じゃ明日。

ソノ子、携帯を切り、慌てて堪えていたくしゃみをする。垂れてきた鼻水をティッシュで押し込み、作業を再開する。

ソノ子

先輩ったら律儀にお昼まで焼きそば手伝うって。

アキオ

ふうん。だけど子供たちは？

ソノ子

もう大きいから自分たちでお祭り参加したいんじゃない。それでお昼は焼きそばとかウインナ食べさせて、それから送っていくって。

アキオ

それから大丈夫か？

ソノ子

ウン、夕方までに帰ればいいんだって。（と、くしゃみ）

アキオ、あわててティッシュボックスを渡そうとする。

ソノ子

それじゃない。そっち（ネギみそ手拭い）付けてみる。

アキオ

えっ、いいの？

ソノ子

ウン、明日巫女舞代わってくれる人いないからさ。なんてったって風邪ひくわけにはいかないから。

アキオ

そうだな。（と手拭いを渡す）

ソノ子

（首に巻きながら）それに鼻水が出てきて、鼻が利かなくなっただから、匂わないんだ。

アキオ

そっか。

ソノ子、鼻にはティッシュをつめ、喉にはネギみそ手拭いを巻き、作業を続ける。

アキオは出来上がった方の段ボールを、入り口の隅に置き、新しい作業の材料を持って来てテーブルに置く。

アキオ

（あらためてソノ子の格好を見て）お前、何だよ、その

恰好。（笑い）

ソノ子

気にしない、気にしない。

アキオ 一応巫女だからさ。
ソノ子 ウン、だけどさ…、
アキオ まっ、そうも言っつてられないか…、
ソノ子 ウン。

黙々と作業を続ける二人。

ソノ子 お腹すいたね。
アキオ ウン、でももうちょっとやろう。
ソノ子 そうだね。
アキオ ほれ、この紅い餅包む方、もっといっぱい作っところうぜ。
ソノ子 えっ、そんなことしたら、ありがたみがなくなっちゃう。
ソノ子 白いのも入れないと。
アキオ だけどさ、ソノ子お前、紅いの好きだろう。
ソノ子 そうだけど…、えっ、どうして？
アキオ お前、ちっさい時から、紅いの、紅いのって…、
ソノ子 ヤダ、そんなこともないけど…、
アキオ だから俺、紅い餅、いつもお前のポケットに…。
ソノ子 えっ、あれっ？ そうなの？ えっ！
アキオ やっ、神様のおまけかな。
ソノ子 神様のおまけ…。
アキオ ウン。
ソノ子 そっか。紅い餅も映画好きも神様が私にくれたおまけな
アキオ んだ…。私、決めた！
アキオ えっ、な、何を？
ソノ子 居直って、居座って、映画会社は辞めない、って…。
アキオ なんだ、そんなこと、当たり前だろ。映画が好きだから
アキオ 映画会社勤務。ネギが好きだからネギ農家。
ソノ子 そっか…、当たり前か。だよ。ただこれ、いつまで
アキオ 続けられる？
ソノ子 決まってるだろ、終わるまで続けられる。
アキオ 終わらなくて、いつ？
ソノ子 さあ、やめる時が終わりだろう…ね。
アキオ

作業はしかし、いつ果てるかもしれないのだ。
黙々と、しかし確実に作業は進んで…。
夜のとばりが下りてきて二人を包み込んでいる。

幕

